

〈近代本論第十五回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1792 ロシア遣日使節アダム・ラクスマン、漂流民大黒屋光太夫（1751～1828→『北槎聞略』1794）を同伴して根室に来航、老中松平定信は通商を約した
- 1804 ニコライ・レザノフ長崎来航、幕府通称拒否（定信は既に失脚）
- 1807 アメリカのハドソン川にて、外輪式蒸気船クラームント号の進水式成功（商用蒸気船の本格化）
- 1808 イギリス軍艦フェートン号、長崎出島に侵入（フェートン号事件）
- 1825 異国船打払令
- 1839 〈蛮社の獄〉 渡辺崋山、高野長英の死
- 1840～42 アヘン戦争（→南京条約）
- 1845頃 英国海軍で外輪式からスクリュウ型蒸気船への転換が始まる
- 1853（7月8日）海軍提督マシュー・ペリー率いるアメリカ海軍東インド艦隊（二隻の外輪式蒸気船、二隻の帆船）が浦賀に来航。江戸湾に侵入して威嚇測量を繰り返す。フィルモア大統領の親書を渡してひとまず去った。
- 1854（2月11日）ペリー再来航（蒸気船三隻、帆船三隻）、一年後の再来航の約束を破り、半年にしたのも威嚇のためであった。
- 1854（3月31日）日米和親条約（神奈川条約）締結、6月、下田条約（和親条約の細則）締結、下田、箱館（函館）の開港、鎖国の終焉。この時点では通商は拒否し、開港のみだった
- 1856（6月28日）アロー号事件、後に駐日英国公使となるハリー・パークス（1828～85）は広東領事として事件に関与した
- 1856（8月）タウンゼント・ハリス、アメリカ公使として下田に着任、通商条約の交渉を老中阿部正弘と行う
- 1856～69 アロー戦争＝第二次アヘン戦争（→天津条約）
- 1857（八月）老中首座阿部正弘急死、堀田正睦老中首座に、条約勅許運動開始
- 1857（12月）ハリス江戸入府、江戸城登城
- 1858（4月）堀田正睦、条約勅許獲得に失敗、失脚。井伊直弼大老となる。勅許なしの条約締結に踏み切る

- 1858 (6月19日) 日米修好通商条約締結 領事裁判権 (治外法権)、関税自主権の剥奪 (段階的に行われた)、片務的最恵国待遇 (これも事後的に確定) 等、やや曖昧な形で出発したものの、典型的な不平等条約として定着した
- 1858 (7月10日) 日蘭修好通商条約、不平等条約
- 1858 (7月11日) 日露修好通商条約、不平等条約
- 1858 (7月18日) 日英修好通商条約、不平等条約
- 1858 (9月3日) 日仏修好通商条約、不平等条約、以上 (安政五カ国条約)
- 1858～59 安政の大獄 (吉田松陰、橋本左内他斬罪刑死)
- 1860 日本の蒸気船軍艦咸臨丸渡米 (勝海舟、福沢諭吉) 咸臨丸は幕府の発注でオランダの造船所で造られた。外輪式ではなく、すでにスクルー式だが、練習船規模で、蒸気は港湾の出入りの時にのみ用いられた
- 1860 桜田門外の変 井伊大老暗殺
- 1859 英国公使ラザフォード・オールコック着任 (～1865)
- 1862 (9月) 生麦事件、島津久光の行列 (久光は藩主の父) に乱入した英国人一行殺傷される (→薩英戦争)
- 1863 (8月) 薩英戦争、鹿児島 の城下町の一割が焼失したが、英国側も三隻の軍艦が損傷を受けた。斉彬以来の軍制近代化が一定の戦果をおさめたと言える。この衝突以降、薩英は急速に接近する。
- 1863～64 下関戦争 (馬関戦争)、長州藩の攘夷令実行に列強艦隊が反撃、長州側はほとんどすべての砲台を破壊され、莫大な賠償金を課せられた (→奇兵隊の結成=近代的徴兵軍制の開始)。長州は幕府の攘夷令に従っただけだったため、幕府がその賠償金を肩代わりし、後に明治政府によって完済された。
- 1864 仏国大使レオン・ロッシュ着任 (～1868)
- 1865 英国大使ハリー・パークス着任 (～1883)
- 1867 (10月) 大政奉還、十五代将軍慶喜、将軍職を朝廷に返上 → 雄藩連合の首長格におさまろうとして失敗
- 1867 (12月9日) 王政復古、幕府および摂政関白職の廃止、三職 (総裁、議定、参与) の設置を宣言 → 幕藩体制とともに旧公家体制も廃絶されたことが重要 → 天皇親政による集権体制の開始
- 1868 (1月) 鳥羽伏見の戦い、旧幕府軍、圧倒的兵力差にもかかわらず薩長連合軍 (土佐藩士も参加) に敗北
- 1868～69 戊辰戦争
- 1868 (3月) 五箇条の誓文
- 1869 (5月) 箱館戦争、五稜郭落城

2. 〈黒船〉への初期対応

- ① 封建的妄想 (閣老) → 白兵戦論、朝貢誘導論

- ② 主体的対応（志士）→ 外交政策の必要性、国際貿易の互惠性の認識、情報戦としての維新動乱（→列強の内政干渉抑止）
- 〈文明化イデオロギー〉 ⇔ 〈主体的国家統一〉の弁証法とすれちがい

3. 阿部正弘（1819～1857）の安政の改革頓挫

- 福山藩主 → 老中（1843 24歳）→ 老中首座（1847～1855）
- ペリー来航時の幕府主席、ハリスの通商条約の交渉相手
- 急逝時のハリスの弔辞文 → リベラル勢力にとっての打撃（引用1）
- 阿部の出発点はアヘン戦争（1840～42）の危機感
- 志士たちと危機感を共有
- 閣老人事のバランス → 開国派（井伊） ⇔ 攘夷派（水戸斉昭）
- 人材登用 + 公武の意見を聞く → 雄藩、朝廷の発言力増大
- 江川英龍（反射炉）、大久保一翁（公武合体、雄藩連合、大政奉還）、勝海舟（海軍伝習所 → 海軍）、高島秋帆（砲術、講武所 → 陸軍）は阿部が見いだし登用した人材である
- 最後の幕政改革の全体的プランナーであった
- 近代的集権の萌芽
 - ① 海軍（伝習所）、② 陸軍（講武所）、③ 学制（洋学所 → 東京大学）
- 急逝により空中分解
- 残ったのは強権論者の井伊と観念論者の斉昭の対立
- 安政の大獄、桜田門外の変へ

引用1

〈1857年7月27日 阿部伊勢守が江戸で死んだということを知り、悲しく思う。彼は閣老会議の次席で（※実際は首席）、ひじょうに勢力があった。彼はつねに、わたしには偉大な叡智の人に思えた。彼は合衆国と他の西洋諸国の実力を完全に理解し、とりわけ、日本がいまや排外的政策を捨て去るか、それとも悲惨な戦争の中に投げ込まれるかの分岐点に直面していることを確信していた。彼の死は日本のリベラルな派閥にとっての大きな損失である。〉（ハリス、同上、中281p）

4. 開港開国の初期対応 ① → 〈白兵戦論〉

- 徳川斉昭（1800～60）の〈手詰めの勝負〉（引用2）
- 上陸させて〈槍剣〉で迎え撃つ、古色蒼然たる〈神国の長技〉（引用3）
- 太平洋戦争末期の〈竹槍訓練〉との不吉な附合
- カリスマ軍人荒木貞夫（1877～1966）の〈竹槍三百万本論〉（1933年）
- 〈お台場〉ドキュメンタリー（NHK）で繰り返される〈白兵戦〉シミュレーション、江戸的痴呆性の根強い残存

→ 妄想の毒キノコを自浄する自己啓蒙が不断に必要

引用 2

〈本文槍劍の儀、神国の長技たる事、申すに及ばず、近来試合の槍劍に至り候ては、其妙を極候。然るに蘭学者流の説行われ、外夷の戦艦、鉄砲の堅利なるに恐れ、所詮外夷には勝つ事能はざる様にのみ思ふ者なきにしもあらず。是其一を知て其二を知らずと言ふべし。戦艦、鉄砲は手詰めの勝負（※白兵戦のこと）に便ならず。〉（徳川斉昭〈十條五事建議書（嘉永六年七月）〉『幕末政治論集』所収、14p）

引用 3

〈仮令かの夷人一旦は辺海の地を侵^{おかす}といへども、上陸せざれば其欲を^{たくましゅう}逞^{たくましゅう}する事を得ず。我壮勇の士卒を撰^{えらび}、槍劍の隊を備へ、機に臨み変に応じ、我長技を以て彼が短なる所を制し、横合より突て出、或は敵の後より切て廻り、電光石火の如く血戦せば、彼夷賊原を^{みなごろし}塵^あにせん事、^{たなごころ}掌^{たなごころ}の中にあるべし。されば神国の武士たらんものは、第一に槍劍の二技錬磨せずんばるべからず。〉（同上）

5. 現実の白兵戦の検証（下関戦争 1863～64年）

- イギリス大使館通訳アーネスト・サトウ（1843～1929）の実戦参加記録（『一外交官の見た明治維新』）
- 攘夷令による海峡封鎖と無差別砲撃に対する四カ国連合（英仏蘭米）の応答
- 実戦経過
 - ① 伊藤たちの和平交渉失敗
 - ② 連合艦隊は海上からの砲撃で長州側の砲台をすべて沈黙させた
 - ③ 陸戦隊が上陸、規模は三千以上、長州側の兵はそれより少なかった
 - ④ 戦闘はほとんどすべて射撃で行われた（白兵戦は皆無）連合側側の死者は十名内外、長州側の被害はそれよりはるかに多かったはずだが、信頼できる史料はない
 - ⑤ 連合側は砲台をすべて破壊したことに満足して撤兵した
 - ⑥ 和平交渉では「破壊できた街をそのままにしておいた」ことを理由に、莫大な賠償金を要求した（→ 幕府、後に明治政府が完済）（引用 4）
- 植民地戦争、あるいはその前哨戦（例えばアヘン戦争）の定型がそのままの形で見られる
- 雄藩の軍事改革の背景があつたにもかかわらず、近代的陸戦の知識の未熟、欠如が著しい（奇兵隊はこの戦争中に組織された）
- 幕末維新史研究には当時の「常識」が欠如することが多いが、この植民地戦争定型が幕末日本に実際に適用されていたことも、その一つの例である

引用4

〈わが方の人々が人家から発砲されている。したがってこの町（下関の町）を焼く権利は十分にあったのだが（！）、あえてそれをしなかった。ゆえに、下関の町に対する賠償金は、戦時における外国の慣例によって、しっかりと支払ってもらわないといけない。〉（サトウ、同上、上146p）

6. 観念的、妄想的〈海防論〉の概観（福沢諭吉 引用5）

- 当時（1865年当時）の福沢は、絶対主義的色彩の献策を行う征長論者だった
- 絶対主義 → 重商開国 → 前近代的軍制の廃止 の連関が見てとれる

引用5

〈外国と附合つきあい始りてより、日本国中の学者先生と云ふ先生は、大概不残のこらず海防策と云ふものを書き、種々様々の理屈を述立て、……大騒おおさわぎの話にて、其有様を見るに、何か外国と散々いくさ師いくさでもした跡で、まだ仲なほりも済まず、互に睨み合にらみあて居る様なり。〉（福沢諭吉『唐人往来』、選集1、81p）

7. 開港開国の初期対応 ② → 〈朝貢誘導論〉

- 最初は開港開国でも、それを幕府の〈徳〉によって〈朝貢〉へ誘導できるという、希望的、妄想的観測
- 間部詮勝あまかたつの例（引用6）
- 自家撞着あつかひの論理
- 朝貢につねに倍増しの褒美を与えれば、どのような国も破産するしかない

引用6

〈条約再議年限の間、西洋各国に和親御取結おんとりむすびに相成候はば、素より利欲に走る夷情、年を追って、御国おくにに多分の品之無く、一同に其利を得候事能はざる事実を弁知致し候はば、是に於いて銘々奇特の懇儀を結び、独ひとり自由の志願を起し申すべく、必然の儀に候得ば、其期に及び、漸々皇統至尊の徳を示し、神国清浄の風儀に懐け、自然と尊信の志を生じ、我より彼を御すべき御威勢に相成候上は、洋外諸蛮の大群も恐るべからず。中にも抜群に帰服致し、献貢の品ももきたりそうろうを持来候時は、交易に倍して報ひ遣し候様御所置之あり候はば、交易の名を改、献貢として、諸品ももきたりそうろう持来候国も出来申すべし。〉（間部詮勝〈上申書、安政五年十月〉『幕末政治論集』所収、108p f）

8. 〈朝貢誘導論〉の構造的要因

- 農本的〈徳治〉の限界

- 農本は江戸幕藩体制の制度経済であり、〈徳治〉は準国教となった儒教（朱子学）のイデオロギーである
- その融合体が体制を化石化させた
- その化石化の系としてこの妄想も生まれた
- イデオロギーの持つ〈仮想現実としての力〉の実例
- 間部詮勝における、現実感覚とイデオロギー的妄想の共在、同居こそ幕末的為政の現実
- 〈朝貢誘導論〉は間部のオリジナルではなく、為政者のトポスの一つだった
- 合理的な開国献策を行った長州藩家老の長井雅楽（1819～63）も、その献策（〈航海遠路策〉）の中で同じトポスを用いている

9. 自己啓蒙の開始

- 植民地主義は強制された蒙昧主義を内包している
（ハリスが完全に沈黙した治外法権、金銀兌換の破壊性と、喧伝し続けた〈貿易の互惠性〉の関係）
- それは〈文明化〉イデオロギーのダブル・スタンダードに根拠を持つ
- したがって根本的対策は主体的自己啓蒙以外にはありえない
- 幕末維新期の自己啓蒙（＝初期的錯綜の自己修正）
 - ① 〈文明〉外交の実態の把握
 - ② 国際貿易本来の互惠性の認識
 - ③ 情報操作の実効性の認識

10. 列強外交の現実的把握の開始

- 雄藩の外交学習が先行
- トマス・グラバー（1831～1911）の仲介による〈長州五傑〉のイギリス留学（井上聞多、伊藤博文他）1863～64、薩摩による五代友厚、森有礼、寺島宗則のイギリス派遣等
- 幕臣福沢諭吉の幕府外交献策（引用7）
- 雄藩の外交学習は世論操作の可能性を秘めていると指摘
- 〈征長建白書〉は絶対主義官僚としての福沢を記録している
- 〈絶対主義的啓蒙〉（服部之総）＝〈明六社〉以前の福沢の隠れた一面（服部の評価は正しく、間違っている）
- 幕府の外交使節の不手際（五代友厚の批判 引用8）

引用7

〈殊に新聞紙の説杯は虚実難指定、其説を以確証とも難致とは申ながら、世間皆文を重んじ、其大論に由ては、一時政府の評議をも変じ候程のものに付、前段諸家より遊説の者共（※雄藩の留学生たちのこと）、新聞紙に力を用ひしは必然の義に付、弁理公使（※

幕府の各国派遣の公使) 御指遣の節は、新聞紙布告の義別段被仰渡、彼地に於て専ら政府の(※幕府の) 御趣意を弁明布告いたし、大名同盟の説を(※薩土同盟や薩長同盟の風説を) 論破候は勿論、此度長賊(※賊徒である長州の) 罪状杯も、手を替へ品を改め、新旧の罪惡、些細の事までも条挙件説(※細かく挙げて一つ一つ論じ)、日々出版いたし(※出版し)、遂に世界中の人をして周く長州の罪を悪ましめ、……) (福沢諭吉『長州再征に関する建白書』1866年7月頃、選集1-95p)

引用8

〈柴田は(※幕府のフランス使節柴田日向守) 至極の俗物にて種々愚説多く、幕府も箇様の人物を欧羅巴に遣すは、皇国の惡命(※惡名) にして、嘆息に堪へ申さず候。〉(五代才助(友厚) 書翰、慶応元年十一月)、『幕末政治論集』所収、424p)

1.1. 国際貿易の互惠性の学習

- 福沢諭吉の啓蒙活動(『唐人往来』)(引用9)
- 写本として流布した貿易啓蒙書(1865年閏5月)
- 〈唐人嫌い〉(西洋人嫌い) の庶民を相手にする(神田孝平のエピソード)
- 「諸色高直」(諸物価値上がり) は一時的
- 養蚕が農家副業として盛んになりつつあるのは、海外需要とリンク
- 新しい市場による雇用の拡大
- 国際貿易は〈時勢〉であり、互惠性は〈世界の道理〉である
- 列強の恣意性は、小国の独立を侵すことはできない(ポルトガルの例)
- 現実性のある理想論
- 列強間の小国の独立可能性は、〈米欧回覧〉のテーマの一つとなる

引用9

〈一と通り考へた所では、欧羅巴諸大国の中に斯る弱き国の独立し居たらば、方々より附睨はれて危うかる可しとこそ思はるれども、道理を守るものは外より動かしやうもなし。若し理不尽に之を攻取らんなどするものあれば、必ず之を救ふものあり。譬へば仏蘭西が攻めんとすれば英吉利が救ひ、露西亞が師を仕掛ければ仏蘭西が加勢を出すなどにて、手を出す者もなく、長き年月を太平無事に過せり。〉(同上、83p)

1.1. 列強貿易におけるダブル・スタンダードの問題

- ハリスも貿易の互惠性が日本の〈インセンティブ〉になるはずだと説いた(引用10)
- しかしそれはリップ・サービスにすぎなかった
- 本音はあくまで〈軍艦外交〉の力の論理にある(引用11)
- その具体的な〈成果〉としての不平等条約と金の大量流出

- したがってこのダブル・スタンダードは〈非・文明国〉（文明化途上国）には非常にむなしく響く

引用 1 0

〈貿易に対する適切な課税は、間もなく日本に大きな収益をもたらし、それによって立派な海軍を維持することができるようになるだろう。そして自由な貿易によって日本の資源を開発するならば、莫大な交換価値を生ずるに至るだろう。この生産は、国民の必要とする食糧の生産を少しも阻害するものではなく、日本の現在有する過剰労働力を回すことによって振興するだろう。〉（ハリス、同上、下87p）

引用 1 1

〈諸外国はこぞって強力な艦隊を日本に派遣し、開国を要求するだろう。日本は屈服するか、しからざれば戦争の惨禍に陥ることになる。〉（同上）

1 2. ダブル・スタンダードのシニシズムは二つの可能性を残した

- 同じシニシズムをもって応える（自暴自棄的攘夷鎖国）
- シニシズムに対して、互惠性の正論で応える
- 自己啓蒙の可能性は後者にあった

1 3. 岩倉具視の主体的互惠論

- 〈形勢一変〉の現状認識（引用 1 2）
- 攘夷から開国への転換（≡木戸孝允）
- 貿易の営利性においては、日本は列強に必敗
- しかしそこに〈富国〉という集团的目標を持ち込めば、貿易の互惠性を活用できるはずだ（引用 1 3）
 - = 営利性を越えた〈国民的エートス〉の導入
- 明治政府の貿易政策の先取り
- 〈不平等条約の改正〉という国民的コンセンサスの覚醒へ

引用 1 2

〈海外貿易ハ、寛永以来漢土、阿蘭陀ニヶ国ノ商船僅ニ渡来スル而已ニシテ、即チ鎖国ナリシモ、安政以来横浜開港ニテ、^{あめりか}亜墨利伽、欧羅巴諸国の商船絶ヘズ往来シ、今又兵庫開港近キニ在ラントス。斯ク形勢一変スルトキハ、吾ガ皇国モ亦貿易ノ道ヲ講究セザル可カラズ。〉（岩倉具視〈濟時策〉慶応三年三月、『幕末政治論集』所収、500p f）

引用 1 3

〈營利ハ素ヨリ外国習熟スル所ノ術ナリ。吾ガ皇国ハ今ヨリ之ヲ学バントス者ニシテ、其巧拙ハ雲壤ノ差アラン。所謂利ニ喩ルモノハ（※利得をよく理解する者は）義ニ疏ク、義ニ喩ルモノハ利ニ疏キノ理ニシテ、豈尋常ノ事ニテ外国ノ右ニ出ツベケンヤ。故ニ貿易ヲ要スルヲ以テ、商買ニ於テモ亦従前ノ如ク惟一家ノ利ヲ謀ルノミヲ是レ事トセズシテ、富国ト云フコトニ着眼ス可キ様誘導セザルヲ得ズ。〉（同上、501p）

14. 近代的政経の基盤をなす〈情報〉の認識 → 自己啓蒙の重要なポイント

- 幕末維新期は未曾有の〈情報戦〉の時代だった
- 情報ハブの形成（勝海舟、アーネスト・サトウの例 → 両者の融合）

15. 情報ハブとしての英国大使通訳（サトウ）

- 通訳から現地外交官としての出世の例（ロッシュ、パークス）
- サトウもこのモチベーションから日本語習得に集中したと思われる
- 加えて彼は対話交流の能力、人間観察の能力に長けていた
- 志士たちが彼を訪れるようになり、政論を好んで行った
- 次第に情報ハブとして認知され始めた（引用14）

引用14

〈わたしは、日本語を正確に話せる外国人として、日本人の間に知られはじめていた。知友の範囲も急に広がった。自分の国に対する外国の政策を知るため、またはたんに好奇心のために、人々が江戸から（※横浜へ）よく話をしにやってきました。わたしの名前は、日本人のありふれた名前（※佐藤）と同じなので、それからそれへとよく伝わり、一面識もない人々の口の端にまでのぼった。両刀を帯した連中は、ワインやリキュールや外国の煙草をいつも大喜びで試し、また議論をととても好んだ。彼らは、論題が自分にとって興味のあるものなら、よく何時間でも腰をすえた。政治問題が、われわれの議論の主要なテーマであった。〉（アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』、上、194p）

16. サトウの状況学習 → 二重権力の存在に気づく

- ミカドの重要性を支持する志士たち = 勤王派（引用15）
- ⇔ 列強は大君（将軍）支持 → 日本の現状にそぐわない（引用16）
- 〈国策〉の変更をパンフレットで提議
- パンフレットの海賊出版が有名になる（『英国策論』（1866）（引用17）
- 私論がイギリスの〈国策〉と誤解される
- 志士たちが彼を〈情報ハブ〉として認知し、活用するようになった

引用15

〈訪問者の多くは、大名の家来だった。わたしは彼らの話から、外国人は大君を日本の元首と見るべきではなく、早晚ミカドと直接の関係を結ぶようにしなければならぬ、という確信を日ごとに強くした。〉(同上)

引用 1 6

〈わたしの想像では、当時の外国の代表たちは、大君を援助してミカドと大名から成る攘夷派に対抗させ、もし必要ならば大君をたんなる封建的支配者とするだけではなく、それ以上の支配者（※つまり君主）にしようと考えていたらしい。〉(同上、上94p)

引用 1 7

〈わたしは、条約の改正と日本政府の組織の改造を求めた。わたしの提案は、大君を本来の地位に引き下げて（※つまり国家元首扱いするのをやめて）、これを大領主の一人と見なし、ミカドを元首とする諸大名の連合体が、大君に代わって支配的勢力となるべきである、というものである。……しまいにはそれは、『英国策論』として、つまりイギリスの政策そのものであるかのように印刷出版されてしまい、大坂や京都のすべての書店で発売されるようになった。これは勤王、佐幕を問わず、イギリス公使館の意見を代表するものと見なされた。そんなことはもちろんわたしの関与するところではなかったのだが。〉(同上、上197p)

1 7. 西郷の情報ハブ活用 → 洗練された外交能力の展開

- 兵庫の開港問題をめぐってサトウと会う（1867年1月）
- 初対面の印象 → 寡黙さ → 「鈍そうな感じ、大きく光る眼」（引用18）
- サトウは〈ミカドおよび雄藩連合〉の代表者としての西郷を意識した
- 西郷はサトウに話すことは、大使パークスに筒抜けだとわかっている
- サトウは主権問題（ミカドか〈大君〉か）を持ち出した
- 西郷はそれには答えず、兵庫の「各藩にとっての重要性」を説明した（引用19）
- 開港を幕府主導で行えば、「大混乱」になる
- 結果として列強は雄藩連合を敵にまわすだろうことを含意（外交的含蓄）
- 西郷の忠告に従えば、列強は『英国策論』通り、ミカドの主権を尊重することになる（西郷はもちろんすでに『英国策論』は読了している）
- 別れ際のさりげない確認 → 「ハリ一卿」への伝言 → すべてが外交折衝だったことを言外に匂わせる
- 高度な外交折衝能力の実証
- サトウはこの場面を、細部を含めすべて記録する価値があると判断した

引用 1 8

〈型のごとく挨拶をかわしたあとも、この人物は甚^{はなは}だ感じが鈍そうで、一向に話をしようとはせず、わたしもいささかもてあました。しかし黒ダイヤのように光る大きな目玉をしていて、しゃべるときの微笑みにはなんとも言えぬ親しみを感じた。〉(サトウ、同上、上226p)

引用19

〈「兵庫に関する一切の問題は、五名ないし六名からなる大名の委員会の手にゆだねることにしましょう。そうすれば、幕府が利益を独占するために勝手な行動に走るのを防ぐことができます。兵庫は各藩にとってとても重要な港です。それは各藩がみな大坂の商人から金を借りているからです(※長期の大名貸しのこと)。この借財の支払いに、毎年藩の産物を大坂へ送らねばなりません。もし兵庫が横浜と同じような形で開港されるならば、藩の財政は大混乱に陥るでしょう。〉(サトウ、同上、上230pf)

18. 西郷と後藤のイギリス議会制度の学習

- 列強の〈正体〉を短期間で学習する必要があった(〈敵〉を知る必要)
- 西郷はイギリスが〈ミカド〉派に関心を持ちはじめたのは、イギリス型の君主制(立憲君主制)を日本に採用してほしいのではと考えた(大久保宛書簡 引用20)
- 〈国民議会〉設立の必要をサトウに論じてみせる(引用21)
- 〈議会〉の両義性に注意 (→ 列藩の合議制も〈議会〉、したがって〈国民〉にはやや疑義が残る → しかしきわめて注目に値する記録にはちがいない)
- この学習中に後藤は英国の代議制と民主主義に本格的な関心を抱きはじめた
- 「議会と憲法を日本に造りたい」云々(引用22)
- 後の自由民権運動において、彼が〈ブレン〉となる下地が形成されていく
- サトウの同僚のミットフォードの証言(引用23)
- この時期、大久保利通ですら、サトウから代議制のブリーフィングを受けている
- 初期政府の〈合議制〉を国民議会への過渡的形態として再解釈する可能性(第七章)
- いずれにせよ、西郷たちがサトウを貴重な情報源として縦横に活用したことは間違いない

引用20

〈第一英国の所存は、日本国王、政柄を握らせられ、其下に諸侯を置^{おき}て、国体(※政体の意味であることに注意)の立方、英国にひとしき制度に相成候儀専一に願居候^{たてかた}訳にて、此度も英国王より、日本国王えの書翰を幕府え差出候由、.....) (西郷隆盛書翰、1867年7月27日付大久保利通宛、サトウ、同上書訳注より援用、上44p)

引用21

〈わたしは京都の情勢を聞くために、西郷に会いに薩摩屋敷に行った。西郷は、現在の
大君政府の代わりに国民議会を設立すべきであると言って、大いに論じた。〉(サトウ、同
上、上45p)

引用22

〈夕飯のあとで、後藤(※後藤象二郎)が政治問題を論じに艦に(※サトウとパークス
は大坂湾に停泊するイギリス軍艦中にいた)やってきた。彼は、イギリスを模範にして国
会と憲法を(!)作ろうという考えを述べ、西郷もこれに似た見解をもっていると言った。
そのことはわたしたちもすでに大坂で承知していた。〉(サトウ、下60pf)

引用23

〈彼は(※後藤象二郎は)、後に維新の原動力となった三人か四人の有能な人物の一人
となった。有名な薩摩の西郷や諸藩の指導者たちと同様に、彼は議事院、すなわち議会制
度の創設を熱心に提唱していた。それは十八ヶ月後によく発足したが(※維新政府の
右院、左院のこと)、創設当初はきわめて未熟なものにすぎなかった。〉(ミットフォード、
86p)

19. 勝海舟の情報ハブ活用 → 事実の力の認識

- サトウ(およびパークス)は幕府の内部情報を勝海舟から得ていた
- 維新後に感謝の訪問(引用24)
- その折、勝は箱館の反乱軍は降伏するだろうと漏らす
- 榎本武揚は彼の部下だった
- 榎本の外交政策に列強が反応しかけたことを暗に批判している
- 彼の〈国家主義〉からの一貫した情報収集、情報操作
- 大政奉還直後も、「内乱勃発の危険」をサトウたちに伝えている

引用24

〈一月十四日に、シーボルト(※アレクサンダー・シーボルト、日本から追放された医
師スパイのシーボルトの長男。オーストリアとの不平等条約締結に「貢献」してフォンの
飾りをもらった)とわたしは、一緒に勝の自宅を訪問した。勝は将軍家の崩壊以来、常に
われわれに政治情報を提供してくれた大いにありがたい人だった。彼は函館の徳川反乱軍
は降伏すると考えていた。別れに望んで(※サトウは帰国を間近にひかえていた)、自分
の脇差しをわたしに贈ってくれた。わたしたちはたがいに尽きせぬ名残を惜しみながら別
れたのである。〉(サトウ、同上、下253p)

20. 勝の情報操作 = 事実伝達のタイミングを計る

- 江戸開城の直後（1868年3月）にサトウは勝を訪ねた（引用25）
- ロッシュの最近の軍事協力案を伝える
- イギリス側の抑止力を明らかに期待しての伝達
- 「大不忠の者の必要性」（草創期の国家にとっての必要性）（『氷川清話』他）
- 同じ精神からの事実情報の伝達
- 第一次征長（1864年）の直前に総参謀格の西郷と会う
- 「幕府の内幕を言えば、もうだめだ」と伝える
- 西郷はこれで征長を形式的に留める決心を固めた
- 薩長連合の伏線、維新史の真の画期

引用25

〈勝が話した中で最も驚くべきことは、二月に前將軍（※慶喜）の閣老とロッシュ氏が協議した際、ロッシュ氏はしきりに抗戦をそそのかし、フランス軍事教導団の士官連中も、箱根峠の防御工事やその他軍事上の使節を執拗に勧告したというのである。大体勝の意見では、自分と大久保一翁（一八一八～一八八八 若年寄、勝の上司）が二人の命を睨う徳川方の激情家の凶手を遁れることができさえすれば、事態を円満にまとめることができるだろうというのであった。〉（サトウ、下193p）

21. 勝の事実主義は蘭学的合理精神の延長上にあった

- 勝はメモ魔だった
- 経世の大勢を見極めるために、統計的資料を閲覧し、抜粋し続けた
- そのエッセンスを、自分から見てベストのタイミングで西郷やサトウに伝えた
- 事実こそもっとも人を動かすことを知っていた
- この事実の力の認識こそ、近代的精神の一つの自己練磨を証左している
- それは学習した合理主義が、幕末維新の動乱の中で、行動主義的に練磨されていた過程を示している

22. 強制された開国は、自己啓蒙によって、主体的開国へと変容した

- このアド・ホックな初期的啓蒙を、近代システム全体の主体的了解へと完成していく必要がある
- 明治初年度の啓蒙課題
= 福沢と〈米欧回覧〉の課題（次節）

（近代本論第十六回キーワード終わり）